

# 芥川竜之介『奉教人の死』の鑑賞

中野 恵海

## 一、はじめ

この作品には物語に這入る前に、二つの引用文が付いている。どちらも「慶長訳」として前者は例の新村出の「南蛮記」(大正・四)に「勸善鈔」と名付けられた本の下巻第五「世界と悪の執着に引れて善の道を恐るる人の迷いを導く事」の章の中より抄出された一節の或る部分をそのまま引用したものであり、後者も又サトウ氏著「日本耶穌会刊行書誌」の中の引用文によるものとの吉田精一氏の指摘があるが、筆者には後者の書名「イミタシオネ・クリステイ」(キリストに倣いて)の文句に心が寄る。それは「キリストの業跡にならう」の意であるが、キリストに倣うとは受難のイエスが大衆達への「愛」をつらぬき通して、ゴルゴダの丘で生命を捧げたことにならうの意であり、作品中には伴天連の言葉として「ろおれんぞ」がわが身の行儀を、御主「ぜす・きりしと」とひとしくし奉らうず志は」とある。そして題名の「奉教人の死」の死は殉教の意であり、奉教人とはここではキリスト教徒を意味し、作品中「ろおれんぞ」に対し、奉教人衆が「まるちり」ぢや、「まるちり」ぢやと叫んでいる通りの意味である。かくして、このイエスに倣った「ろうれんぞ」の「まるちり」の姿を描くことがこの作品の内容となっているのである。

二、美少年「ろおれんぞ」

或るクリスマス夜の夜、長崎の「さんたるちや」と云う西教寺院の門前に行き倒れになった少年、名は「ろおれんぞ」と名告ったが故郷は「はらいそ」（天国）父の名は「でうす」（天主）などとふざけて、誤魔化してしまう美少年が、伴天連やそして何よりも奉教人衆の慈悲の心から寺中に養育されることになったのが、この物語の発端である。

最初に先づ読者の目につくのは、勿論このキリシタン本を真似た文体であつて、これはまさに完璧の出来栄であるとは、この作品に寄せられる大方の世評の一致した意見である。

その叙述のなかで書き手が伴天連、つまりは日本人ではない西洋人の手になるものだと思わせようとする技巧が随所に見られる。例えばあの偉丈夫の法兄弟「しめおん」が、この美少年「ろおれんぞ」と仲睦まじうするさまは、

——「ればのん」山の松ひのきに、葡萄えびかづらが纏まといついて、花咲いたようであつたとも申さうず。

とあつて、比喩に旧約聖書に出てくるパレスチナ北境の山の名を出すとか、作品の後半に描出される長崎の町の大火の様を、

——まことにその折の景色の凄じさは、末まつご後の御裁判おんさばきの喇叭らっぱの音が、一天の火の光をつんざいて、鳴り渡つたかと思われればかり、世にも身の毛のよだつものでござつた。

と述べるとか、或は更に結末に近く「ろおれんぞ」がまさしく女であるとの証あかしがはつきりと示された時の描写に、——まことにその利那の尊い恐しさは、あたかも「でうす」の御声が、星の光も見えぬ遠い空から、伝わつて来るようであつたと申す。

とあるのなどその良き例のように思えるが、又「ろおれんぞ」に怪しげな噂が立つたことを叙するあたりに、かまはり釜張

の娘が

——行きずりに「ろおれんぞ」の足を踏んだと云い出すもの

があつたとか、法兄弟の「しめおん」が、「ろうれんぞ」を弟のようにもてなし、

——「えけれしや」の出入りにも、必仲よう手を組み合わせて居った。

などの叙述ぶりは、これ又西洋人の風習をあらわすもので些末なことのようであるが、つまりは書き手が日本人でないという雰囲気がただよう具合になっているのである。

そして美少年「ろおれんぞ」の容姿を叙する際、

——顔かたちが玉のように清らかであつたに、声ざまも女のように優しかったれば、

と、はじめに説明されて以来極めて頻繁に「美しい顔を赤らめて」「したたかその美しい顔を打った」「あの少年のやさしい姿」「清らかに痩せ細つた顔」「哀れにも美しい眉目のかたち」「あえかなるおれんぞの優姿」という風な女性にふさわしい修飾語がつかわれている。これは「ろおれんぞ」が女性であり、その正体が最後のドラマチックな場面です。その場面の描写

——御主「ぜす・きりしと」の御血潮みんちしほよりも赤い、火の光を一身に浴びて、声もなく「さんた・るちや」の門に横はつた、いみじくも美しい少年の胸には、焦げ破れた衣ころものひまから、清らかな二つの乳房が、玉のように露あわれて居るではないか。今は焼けただれた面輪おもてわにも、自らなやさしさは、隠れようすべもあまじい。おう、「ろおれんぞ」は女ぢや。

は素晴らしい。清潔な少女の胸もとを描いて、これは我が近代文学中類ちゅうるいを絶つるものではなからるか。そして最後に、傘張の娘が

——月も満たず女の子を産み落いた、

とある。「月も満たず」はこの児の出生について、何かの影、何か罪のにおいがただよう風の描き方にしたのであるが、「女の子」が初出では「男の子」であるという事であるが、では何故「男の子」を「女の子」と訂正したのであるか。愚見を述べると、篇中傘張の娘は誠に諸悪の根源でこの罪深き女が又ぞろ女兒を産むという方が女性の持つ罪障の、かげりを濃くする効果があるのではないかと芥川が考えた、とも思われる。

### 三、奉教人衆について

奉教人とはこの作品ではキリスト教徒を意味するので、奉教人衆とはその復数でキリスト教徒達の意となる。そしてこの奉教人衆がこの作品では仲々重大な意味を帯びることになっていると筆者は考えている。結論から先に申し上げると、ここに芥川の描く奉教人衆とは、「大衆」を意味する。そして大衆とは天才を理解せず、天才を殺すものである。その良き例はイエスキリストと大衆の如きものである。イエスは大衆への愛を貫き通してゴルゴダの丘に果てたのであり、愚かなる大衆はこれを理解せず遂にイエスを他の泥棒達と共に殺したのである。そしてこの意見、この主張は芥川の文学的遺書「西方の人」に明記されている通りである。この奉教人衆なるものがこの作品でどう描かれているか、すこしく詳細に見てゆきたい。

先づ作品の冒頭で、或る年のクリスマスの夜、寺院の戸口に行き倒れとなっていた「ろおれんぞ」という少年を、「参詣の奉教人衆が介抱し」そして寺中に養われる事となった。と述べられる。人情もろい奉教人衆の同情と愛憐がこの気立の良い信心堅固な風姿のよい少年に注がれたのである。それが三年あまりの年月が経つと、元服間近い「ろおれんぞ」に関してピンクニュースが流れる。即ち町方の傘張の娘との噂さで、

——さればおのづと奉教人衆の目にも止り、娘が行きずりに「ろおれんぞ」の足を踏んだと云い出すものもあれば、二人が艶書をと리카わすをしかと見とどけたと申すものも、出て来たげでござる。

となつてゐる。三年の月日がたつて、人の心の大変にかつたことを思わせる。足を踏むとか艶書をと리카わしたとかは全くの偽りであつただから、この様な事柄に関する大衆の軽薄な心がよく出てゐる。そして大事件が出来する。つまり娘が妊娠し、その父の名は「ろおれんぞ」ぢやと娘が断言し、

——かうなる上は「ろおれんぞ」も、かつふつ云い訳の致しようがござない。その日の中に伴天連を始め、「いるまん」衆一同の談合に由つて破門を申し渡される事になつた。

のである。この場合の破門は「ろおれんぞ」にとつては誠に残酷で、それは宗門からの追放とその日から生計の途の絶たれる事を意味する。でもこの様な罪人をこのまま寺中に置いては神の栄光にも関わるというので、

——日頃親しう致いた人々も、涙をのんで「ろおれんぞ」を追い払つたと申す事でござる。

と、なつた。この処置に出たのは「伴天連を始め、いるまん衆一同の談合に申つて」とあるがおおねのところ奉教人衆のあることは勿論であらう。大衆は即ちジャーナリストでありジャーナリズムであり、人生の現実そのものであるとは揺がぬ芥川の人生観である。かくして「ろおれんぞ」放逐が描かれる、その場面描写にひと工夫がなされてゐる。

——その時居合わせた奉教人衆の話を伝え聞けば、時しも凧にゆらく日輪が、うなだれて歩む「ろおれんぞ」の頭のかなた、長崎の西の空に沈まうず景色であつたに由つて、あの少年のやさしい姿は、とんと一天の火焰の中に、立ちきはまつたように見えたと申す。

愚かなる大衆の眼に映るこの美少年の立ち姿はまことに目の裏に刻み込まれたように印象的である。そしてこの

時のこの姿が一年後の長崎の町の大火の時、再び描かれる。燃えさかる傘張りの娘の家、そこに残された赤ん坊の生命を救わんとまっしぐらにその中に飛び込んだ「ろおれんぞ」。そしてその姿を見た、

——「しめおん」は思わず遍身に汗を流いて、空高く「くるす」（十字）を描きながら己も（おかれ）「御主、助け給え」と叫んだが、何故かその時心の眼には、こがし 凜に揺るる日輪の光を浴びて、「さんた・るちや」の門かどに立ちきはまった、美しい悲しげな、「ろおれんぞ」の姿が浮んだと申す。

今度は実際の姿ではなく、「しめおん」の心眼に浮んだのであるが、この繰り返し描かれる「ろおれんぞ」の姿はなんの姿であるか。作者芥川の意図はいかなるものか。筆者は次のように考えている。

およそ宗教画に、「円光」というものがある。イエスをはじめ、その母マリア、大天使、そしてエンゼル達の頭のうしろに囲むようにして円い光が描かれその神格をあらわしている、これが円光である。仏教においてもこれがある。て、仏、菩薩の頭の後方からさしている光の輪で、後光と呼んだりしている。今追放される「ろおれんぞ」、それが沈みゆく太陽を背景にして立つとき、この太陽が円光となっている。「ろおれんぞ」はまこと受難のイエスキリスト様であった。傘張の娘の「こひさん」（懺悔）にあるように、

——まことに御主「ぜす・きりしと」の再来かともおがまれ申す。  
そのままである。

愚かなる大衆には何となくこの姿が印象的であっただけで、何とも理解されない。このあと「ろおれんぞ」には苦難の日がつづく。そして大火事である。赤ん坊が火の中に取り残されたことは知れたが、剛勇の「しめおん」さえためらったその火焰の中に飛び入った「ろおれんぞ」の健気けんきな振舞に驚きながら、

——さすが親子の情あいは争われぬものと見えた。

という風に一言で人の善事徳行を打消してしまふ奉教人衆であった。それが然し「乱れとぶ焔の中から」もろ手に幼子をかい抱いて「天くだるように姿を現し」そして又もや燃え尽きた梁うつばみに打たれて、焔の中に姿がはたと見えなくなったとき、

——居あわせた程の奉教人衆は、皆目の眩くらむ思いがござった。

となつてしまふ。そして「しめおん」が今度はさかまく火の嵐の中へ、「ろおれんぞ」を救わんとする一念から躍りこんだ時、

——親子を囲んだ奉教人衆は、皆一同に声を揃えて、「御主おんぬし、助け給え」と泣く泣く祈りを捧げたのぢや。

行き倒れの姿を見て可愛いかあそうだとばかり愛憐の心をわき立たせ、三年程して、ピンクニュースを流して、ふしだら娘の口車に乗り、涙をのんでお寺を放逐し、極めて印象的な受難の姿さながらの姿を目のあたりに見ながら少しも氣付かず、一年も経つと、

——「えけれしや」に詣づる奉教人衆も、その頃はとんと「ろおれんぞ」を疎うとんじはてて、伴天連はじめ、誰一人憐みをかくるものもござらなんだ。

という有様であった。そしてその大衆達は今や大変化を来し、泣く泣く祈りを捧げるまでになつた。「しめおん」の腕に抱かれて火の中から救い出されて来た時、「ろおれんぞ」は、

——奉教人衆の手に昇あかれて、風上にあつたあの「えけれしや」の門かどへ横えられた。

——というふういふように鄭重ていじゆうな扱いになつている。そして傘張の娘の「こひさん」に会い、

——肩を並べた奉教人衆は、天を焦がす猛火も忘れて、息さえつかぬように声を呑んだ。  
のである。そして遂に次の叙述となる。

——二重三重に群った奉教人衆の間から、「まるちり」(殉教)ぢや、「まるちり」ぢやと云う声が、波のように起ったのは、丁度その時の事でごさる。殊勝にも「ろおれんぞ」は、罪人を憐む心から、御主かんあるじ「ぜす・きりしと」の御行跡ごぎんせきを踏んで、乞食にまで身を落いた。して父と仰ぐ伴天連も、兄とたのむ「しめおん」も、皆その心を知らなんだ。これが「まるちり」でうて、何でござろう。

天才を理解せず天才を殺す、愚かなる大衆の姿を芥川はこの作品で奉教人衆として描いた。前述の引用文の書 *Imitative Christi* (キリストに倣いて) の姿は「ろおれんぞ」としてそのままにうつされている。そして父と仰ぐ伴天連も兄とたのむ「しめおん」を皆その心を知らない、というのは、これ等の人々も特別の人達でなく、単なる奉教人衆の一員たるに過ぎない事を意味する。「ろおれんぞ」の殉教の姿を前に「垣のように佇んでいる奉教人衆の」とか「風に吹かれる穂麦のように、誰からともなく頭くぶを垂れて」とかの形容比喩は無能力者を意味するだろう。さすれば、夜風に白ひげをなびかせて御教かんきょうを誦よせられる伴天連とか、邪淫の戒を破ったとかの叙述は多分に皮肉なものになるのである。

### 利那の感動

この作品の結びの言葉は次の如くである。

——なべて人の世の尊さは、何ものにも換え難い、利那の感動に極きわまるものぢや。

つまり、人生に於て最高の価値あるものは「利那の感動」というものである。との意であり、これが率直なまに生の形なまで自身の人生観を吐露することの少なかつた芥川の言葉として注目されるべきものと考えられる。

この「利那の感動」について吉田精一氏は「日本近代文学大系38」の頭注に於て、他の芥川作品「或阿呆の一

生」(昭和・二・遺稿)「戯作三昧」(大正・六)「地獄変」(大正・七)などの一連の作品にくり返し書いていると指摘されている。今それを具体的に列挙してみると、「或阿呆の一生」にはその第八章「火花に」

——架空線は不相変鋭い火花を放っていた。彼は人生を見渡しても、何もとくに欲しいものはなかった。が、この紫色の火花だけは、——凄まじい空中の火花だけは命と取り換えてもつかまえたかった。

とあり、次の「戯作三昧」では主人公の馬琴が深夜神来の興に乗って筆を走らせる描写に

——この時彼の王者のような眼に映っていたものは、利害でもなければ、愛憎でもない。まして毀誉きよに煩わわされる心などは、とうに眼底を払って消えてしまった。あるのは、唯不可思議な悦びである。或は恍惚たる悲壮の感激である。

とありそして、「地獄変」では畫師えしの良秀が眼前で燃かれる御所車の火の柱を前にして、

——何と云う不思議な事でございます。あのさっきまで地獄の責苦に悩んでいたような良秀は、今は云いようのない輝きを、さながら恍惚とした法悦の輝きを、皷だらけな満面に浮かべながら、

という描写が見られる。右に挙げたような「架空線の紫色の火花」や「恍惚たる悲壮の感激」そして「恍惚とした法悦の輝き」は「奉教人の死」に云う「利那の感動」に通ずるものである事は吉田氏の指摘の通りだと思ふ。筆者は尚この上に「舞踏会」(大正・八)を書き加えたいと思ふ。「舞踏会」とは明治十九年十一月三日(明治の天長節)の夜の鹿鳴館での「舞踏会」であり、そこに登場する——家の十七才の令嬢明子と一人のフランスの海軍将校とのささやかなロマンスが描かれる。終りの方の場面で、二人がバルコニーに出る。彼女に腕を貸しながら庭園の上の空に黙々と眼を注いでいる彼に、明子が

——「御国の事を思つていらつしやるのでしょうか。」と半ば甘えるように尋ねて見た。

すると、折しも夜空一杯にひろがった赤と青との火花が消えようとする、

——私は火花の事を考えていたのです。我々の生ウイのような火花の事を。

これが、海軍将校の言葉である。憂鬱を胸底に秘めて東洋の涯の日本にまで旅して来た詩人と人生初めての舞踏会にのぞみ、胸をときめかす日本の娘との出会いが馥郁たる菊の香につつまれて展開される。「我々の生ウイのような火花」とは殆んどこの作品の主題テーマを示している。そしてこれも又右に述べた「刹那の感動」に通うものと考えてよいのではないか。

そのあと続く文章が、難解の噂さ高いものである。

——暗夜ぐみよの海にも譬えようす煩惱心の空に一波をあげて、未出ぬ月の光を、水沫みなほの中に捕えてこそ、生きて甲斐ある命とも申そうす。

古来仏教では「智慧の光明」という風に、光明は仏の智慧をあらわす。その失われた凡夫の煩惱の心が暗夜の海にも譬えられる。そこに一つの事件を起し、いまだこの汚れた現世に、お姿を現わさぬ月の光、即ち真如まにょの光に出遭でえてこそ（刹那の感動に浸り得て）はじめて生甲斐ある人生という事が出来よう。がその大意であろうかと思う。この物語に述べられた「ろおれんぞ」の話は、わづか四年間程のものであり、その他は何一つ知られてはいない、然しそんな事は何程の事でもない。

——「ろおれんぞ」が最期を知るものは、「ろおれんぞ」の一生を知るものではござるまいか。  
は力強い結びの言葉の役を果たしている。

## 五、むすび

この作品には第二部がついていて、「ろおれんぞ」物語の典拠を挙げ、作者の所蔵する「れげんだ・おうれあ」という書物について解説している。芥川は何故このような二部をつけたのであるか。それは、南蛮情緒を掻き立てん為にその文章、文体まで摸したところに通じるものがある。語り口や、その知識のもろもろは主として「南蛮記」に拠ったことは明白であるが、第一部の本文の場合と同じく出来上ったものは誠に見事である。芥川の技巧の完璧さはこの二部に於ても充分に発輝されている。虚偽であることを公表しながらのこの機智とユーモアの上に立つ芥川の文学の世界は大きな魅力を持っている事を感じずにはいられない。

最後に、この物語の粉本としては従来例の「聖人伝」中の「聖マリナ」に拠るとされている。全くそうに違いなからうと思われるが、その換骨奪胎振りの見事さには驚ろかされる。「今昔」をとり入れて「羅生門」をなしたようなものでなく、たとえ、男性と思われていたのが女性であったというところを真似たという具合のところはあっても、この「ろおれんぞ」は法兄弟や奉教人衆とのかかわりはじめ、すべてに文学的肉付けがなされ、最後に刹那の感動を置いてその主題テーマを示し作者の人生観をも覗のぞかせている。これでは、赤ん坊を平然として受け取り、詫わびを入れれば平然としてそれを返したという「白隠禪師」の逸話からヒントを得たと云っても同じ事で、この作の今述べた二部と同様、いよいよ作者芥川の独創と技巧の冴さえを見るばかりである。